

江の島における色彩基準と景観の変容

柴田明美

色彩は「形」や「大きさ」とともに景観を構成する要素の一つであるといえる。景観における色彩は、その土地の自然や文化、歴史の影響を受けることで地域によって特徴的であったり画一的であったりする。近年その色彩について、景観形成または景観保全を目的として各自治体が条例を制定し、その中で色彩基準を設けるなどして規制・促進を行うという動きが活発になっている。本研究ではこの色彩基準に焦点を当て、色彩基準の形成過程やその類型を探るとともに色彩基準が施行されている地域として江の島をフィールドに選択し色彩基準と地域景観の関係に注目した。

観光地として広く知られる江の島であるが、現在では自然や歴史的遺産の保全や観光地としての地域振興等の課題を抱えており、これらの問題を解決するために江の島らしいまちづくりを目指してさまざまな条例が施行されている。そのうちのひとつとして神奈川県藤沢市は江の島特別景観形成地区を定め、その中で色彩に関する基準を設定

している。多くの観光地では地域に由来存在する街路の色を保全するという形で色彩基準が作られるが、江の島は島内にみられる岩肌の色を地域の色として推奨する内容の基準を作成している点で非常に興味深い。

調査には資料調査と実地調査を用い、資料調査では地域と色の関係について述べている文献とともに色彩学の文献も使用した。実地調査においてはカラーカードを併用した視感測色により屋根及び外壁の色を調査し、建物の屋根や外壁の色と色彩基準がどのように関係しているかを把握した。また住民及び観光客への聞き取りをもとに建物の改修の状況、地域の色に対する意識を調査した。江の島の建築物にみられる色について色彩分布図やカラーパレットを作成し現地調査の内容と合わせて分析することで、色彩基準自体が持つ問題点、色彩基準が江の島の色彩環境にもたらした影響と今後の可能性について述べる。

芝地と植え込みの百葉箱に見る夏季気温変化の考察

清水敦子

近年、夏季最高気温が年々上昇していることや熱帯夜の増加、熱中症による死亡者が増加していることなどにより、都心部を中心とした気温の上昇が注目を集め、自治体を中心に行っているヒートアイランド緩和対策が、マスコミでも大きく取り上げられるようになった。しかし、大都市におけるヒートアイランド現象自体は古くから認められており、ヒートアイランド現象について、様々な観点から多くの研究がなされている。東京のヒートアイランド現象の把握や、緑化によるヒートアイランド現象の緩和の研究は数多くなされてきているが、都市内外や植生による気温分布の研究が中心となっているものであり、観測地点そのものに対する研究はされていない。そこで、観測機器の設置環境ということに注目し、ミクروسケールで見たときに、

気温変化にどのような特徴が現れるのかということについて研究を行った。

観測は、お茶の水女子大学(以下お茶大)構内の2地点の百葉箱を取り上げて行った。気象庁が観測地点として最も適しているとしている場所に特徴が近い、お茶大学生会館前中庭を芝地の観測点とし、悪条件が重なっていると思われるお茶大附属小の百葉箱を木陰の観測点として比較を行った。

観測期間は2005年8月10日から9月6日までの1ヶ月間である。観測にはデータロガー付温湿度計を用い、10分間隔の連続観測を行った。観測で得られた結果から、日中は芝地の気温が木陰よりも高くなるが、夜間はあまり気温に差が生じない。これは、日中、直射日光の当たる芝地はその影響を受けて気温が上昇するのに対

し、木陰では、樹木の冷却効果により、気温が上がりなかつたためといえる。日中の気温差は、天候によって左右され、晴れている日ほど日中の気温差の変動幅は大きく、雨が降っている日ほど日中の気温差の変動幅は小さいことが分かった。また、夜間の気温差は小さく、天候によって気温差に大きな変化が現れることは無かった。

ミクロスケールでの観測だったにも関わらず、

気温は観測地点の周辺環境に大きく左右された。気候変化がより気温に反映されるのは芝地での観測点であり、周辺に障害物がない地点の方が天候と気温の関係を調べるのに適していると考えられるが、季節が夏の1ヵ月に限定されているため、観測地点を定めるための参考とするには、他の季節での気温変化の実情や他の特徴のある観測点での観測を行う必要がある。

靖国神社における表象の歴史

田代光恵

「靖国神社」というと、何を一番始めに思い浮かべるであろうか？

政治？外交？参拝？思想？歴史？どれもあてはまって、実はどれも大切なことを見落としている。本論文の研究動機はここにある。靖国神社という場所であるにも関わらず、場所に関する研究はほとんどない。そこに論点を絞っている。

この大切なこと、とは靖国神社の「空間的多様性」であり、一元化された価値ではない「包容力」である。本論文では、靖国神社の創建当初からの歴史に沿いながら、その「多様性」と「包容力」という側面を描き出す。たとえば、明治期の境内では、相撲や競馬、サーカス、観覧車など今では考えられないような催し物が招魂祭の度に開かれていた。民衆が多く集う、遊興の空間だったのである。それが、日本のナショナリズム、軍国主義が台頭する中で、そのような催しも消えていき、一元化された空間へと変質する。

そこで、なぜ明治期にはそのような特性を持ちながらも、それがなおざりにされてしまっ

ているのか、と言うことに対して考察を加える。戦争という国家的事業と密接に絡み合うことで靖国神社が果たしてきた役割。それを追うことで現在イメージされやすい靖国神社の姿が浮かんでくる。

現在イメージされやすいことの1次データを集めるためのインタビューや、アンケートも行っている。その中では、多種多様な言説を靖国神社が抱え持っていることが分かる。そして、民衆の空間として再び生まれ変わろうとしている、靖国神社自身の姿も浮かび上がってくる。

靖国神社を調べれば調べるほど、固定化された価値観に収まりきらない柔軟性、包容力、開放性、自由を感じる。本論文の中ではそれを逐一紹介しており、靖国神社を思想などから離れてそれ自体、一つの場所として考えるときの良き材料となると思っている。

私個人の靖国神社に対する考えはまだまとまっていないが、そのような中途半端な存在をも靖国神社は受け入れてくれる空間性を持っていることを最後に述べている。

東京論—如月小春の身体論を通して

田中真実

東京が大きく変化した高度経済成長期に幼少期を過ごし、そこで得た感覚を演劇の中で表現し、子どもたちとのワークショップをライフワークと

した劇作家、如月小春の視点を通して東京という都市を捉えていく。

如月小春をテーマにした理由は大きく3つある。